２００８．３．２８．

鳴海 風　様

拝　復

本日（３月２８日）岩波書店より「著者代送」として御高著『和算小説のたのしみ』（岩波化学ライブラリー 142，2008 年 3 月 14 日）をお贈り頂きました。深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

ただ、本書を拝読致しまして、驚愕し、尚かつ怒りを通り越して非常に深い悲しみに沈んでおります。御著を拝読してから数時間絶望の余り立ち上がることができませんでした。これは大袈裟なことではありません。

貴兄が小生のこの気持ちを推察できないとすれば、それこそが非常に深い悲しみでもあります。

何故ならば、貴兄と小生を結びつけて下さったのは平山諦先生であり、その『和算の誕生』（恒星社厚生閣）を発展させたのが拙著『和算の成立』上下（私家版）です。この私家版『和算の成立』を貴兄に差し上げたところ、貴兄が「是非とも小説にしたいが、許可してくれるか？」という手紙を頂きました。小生は共著者である中村正弘先生とも相談の上で、貴兄に拙著の小説化を許可したのです。それで貴兄は愛知県から四輪車ではるばると拙宅までお越し下さったのも、つい最近のことのようない思い出します。その途中で磐田の東名高速道路のインターチェンジで待ち合わせ、故平山諦先生のご自宅へご案内したこともよく覚えています。貴兄と拙宅の話は楽しいひとときでした。そのとき建部賢弘宛の田沼主殿頭の書簡や間重富の大きな書幅をお見せしたことも懐かしく思い出します。そして、お礼にとお米を頂戴したことも・・・・。

その後、拙著私家版『和算の成立』上下は、改訂増補して恒星社厚生閣より『和算の成立－その光と陰－』（2004 年 7 月 25 日）出版されました。これも早速貴兄にお贈りし、お礼のお手紙を頂きました。

然るに、御著『和算小説のたのしみ』（＊特に pp.77-81）を拝読して,驚愕しました。簡潔に結論を申し上げますと、拙著『和算の成立』上下（私家版）も拙著『和算の成立－その光と陰－』（恒星社厚生閣，2004 年）にたいして、一言も言及されていないことです。御著 pp116-117 参考文献に載せて頂いただいているのかと見ましたが、此処にもまったく見当たりません。参考文献には２０冊もの著書が有るにもかかわらず、拙著は全く無視されています。

もし、貴兄がこのような扱いを受けたならば、どんなお気持ちでしょうか。貴兄が拙著をまったく引用されず、無視される理由が理解できないのです。

何故ならば、貴兄は御著『和算小説のたのしみ』を書くために、「遠藤寛子著『きりしたん算用記』が入手できず（小生に）貸してほしい！」とわざわざ電話までくれましたね。小生はすぐさま貴兄宛に『きりしたん算用記』を送りしましたね。小生は少なくとも貴兄の御本の出版に積極的に貢献しているにも係わらず、拙著をまったく引用せず無視するのか理解できないのです。

たとえば、

①井上筑後守政重や切支丹屋敷のことと和算史を関連づけたこと

※井上政重の出自まで詳細に追究したのは拙著だけです。井上政重はいままでにほとんど注目されていなかった人物なのです。

②ジュセッペ・キアラに注目し詳細を追究したこと

※このことはキリシタン研究の碩学上智大学教授尾原悟教授や当時東京大学教授五野井隆史教授、伊東俊太郎名誉教授より高い評価を頂き、いまでもお手紙を頂いております。昨年は伊東俊太郎教授より御講演のご案内をいただき、親しく激励もされました。

③ p.81 調布サレジオ神学院にあるジュセッペ・キアラの墓石の所在を発見したこと

※それまでは小石川伝通院に本物に似せた墓石を作りイタリア大使に碑文をもらうほど、本物の所在は不明でした。それでクロドヴェオ・タッシナリ神父に『和算の成立』上（私家版）を捧げているのです。タッシナリ神父の御文を載せたのです。また、拙著をお贈りしたところ小生はタッシナリ神父より直接にお手紙を頂いております。

少なくともこの３点だけでも拙著によって、はじめて明らかにされたことです。

御著『和算小説のたのしみ』を再読しましたが上記の３点も含めすべて貴兄が発見されたと、御著の読者は思うでしょう。

如何に小説だからといっても許されることと許されないことがあると思います。貴兄が小説として想像力で書かれたと部分と拙著の発見とを峻別すべきです。中村正弘先生がお元気であったならば激怒され訴訟したと思います。それは拙著は中村正弘先生との共著と言うべきものだからです。

また、少なくとも小生と交流のある研究者や読者の方から、御著に対して疑問を小生に寄せてくるでしょう。

たとえば、この岩波科学ライブラリー 135『伝説の算数教科書（緑表紙）－塩野直道が考えたこと－』の著者松宮哲夫先生は中村正弘先生のお弟子さんで大阪教育大学教授をされていました。松宮先生と小生は、非常に親しく交流させて頂き、昨年もお会いし食事を共にさせて頂いております。当然拙著の経緯を当初からよく御存知です。また、拙著を高く評価して下さっています。

京都大学数理解析研究所で行われる数学史研究会で小生も話をさせて頂き、多くの研究者と知り合い、交流させて頂いております。その際にも好意的な評価をして下る方もいます。もちろん歴史研究ですから、数学研究と違い、絶対的な評価などあり得ないのですから、拙著を評価しない方もいるでしょう。それはしかたがないことです。だからといって、拙著のある上記３点だけでも自説として他の方が論著にしたならば、盗作です。研究者としての誇りも地位を失うでしょう。小説家もまったく同じです。

もし小生が貴兄の御本に対して何らコメントしなかったならば、逆に問題だと思います。

再度申し上げます。何故拙著を引用し参考文献に採り上げなかったのでしょうか？

必ず御返信をお願い致します。御返信がない場合、あるいは、御返信の内容によっては、適切な処置を執ります。

草　々

鈴木武雄

鈴木武雄

ＰＳ．小生はこれまで『東洋数学史への招待－藤原松三郎論文集』（東北大学出版会）、平山諦著『和算の歴史』（ちくま学芸文庫）の解説で貴兄の御本『円周率を計算した男』『算聖－関孝和の生涯』を載せています。これらで本を紹介した著者からはお礼を頂いた方もおります。